文部科学大臣賞

大雪の中の三日間

福井県　粟野中学校　三年
矢賀部　光夏多

今から思えば、私はあのとき、心の中にワクチンを接種したようなものかもしれない。その抗体は一生持続するだろう。私の心の奥深い細胞に、しっかりと届いている。

そのワクチンの名前は、きっと「思いやり」。あのときの経験は、一生涯忘れられないもので、今私の命があるのは、あのワクチンがあったからだと思っている。

2021 年 1 月 9 日の朝、敦賀(つるが)は快晴だった。金沢で行われるピアノオーディションに出場するため、私と母は緊張と期待が入り交じった気持ちで車に乗った。いつも運転を担当する母も、本番のスケジュールを気にするのみで、天気予報もチェックすることなく出発した。高速道路上で異変を感じたのは、スキー場のある辺りだった。恐ろしいほど路面の雪が多い。吹雪になりそうな空だ……。

そのときからの 3 日間のできごとは、私にとって、まさに心のワクチンと言うべきものになった。今まで公(おおやけ)にすることなく心に秘めてきたが、この冬の高校受験を前に、気持ちを整頓したいと思うようになった。一生忘れられない恐怖の中の光と、向き合ってみたいと思う。

金沢までの道は、今まで経験したことのない悪路だった。雪はやまず、圧雪(あっせつ)状態の上にさらに降り積もっていく。スタックした車を何台も避けて通過した。不安を抱えながらも演奏を終えて、福井に向けて出発したのは、夜になりかけた頃だった。

無事を願って進んだが石川と福井の県境で、やはり車列は動かなくなった。大きく全国ニュースでも取り上げられた『大雪・北陸道・最大 1500 台・立ち往生』の 1 台になってしまったのだ。

雪は激しく降り続いている。辺りは真っ暗闇だ。先も後ろもどうなっているのか、まったくわからなかった。母と二人、車の中でただ、前を見つめるしかなかった。どれほど時間が経っただろうか。

「大丈夫?　トラックの中で休んでいいよ。」

大型トラックの運転手の方だった。張りつめた中にも、温かさのある声が嬉しかった。

「排気ガスで死なないで。」

と吹雪の中、生存確認してくださったのは道路公団の方だった。大雪警報が発表されているのに気がつかず外出した私たちなのに、声をかけてくれた。申し訳ない気持ちと、雪に埋もれる恐怖でいっぱいの夜が明けた頃、

「がんばろう。生きて帰ろう。」

と、何時間も歩いて、食料を調達してきた方がチョコレートを渡してくれた。その言葉に涙があふれた。

県境に住む同門の友人が『必ず助ける』と、インター近くで待機しているという。ともに眠らず、『生きていて』と励まし続けてくれた友人たちもいた。

大雪の三日間、白と黒の世界で正気を保っていられたのは、「人のつながり」があったからだと思う。これから私は、音楽家を目指し歩き出すが、感謝しながらステージに立ちたい。それが「思いやり」というワクチンを持つ私の使命なのだ。